

私を通った幼稚園・保育園 (14)

保育園という原風景に住む人々

新開 よしみ

姉は幼稚園、よっちゃんは保育園

今でも私のことを「よっちゃん」と呼ぶのは、原家族と親戚、それにごくわずかな古い友人だけだ。保育園に通っていた頃は、周りの誰からも「よっちゃん」と呼ばれていた。

よっちゃんは三人姉妹の次女。一九六〇年代に

東京都小金井市にある保育園に、ちゅーりっぷ組(年中)から、さくら組(年長)へ、卒園までの二年間通った。三つ年上の姉が幼稚園に通っていた頃、毎朝母親に長い髪を三つ編みに結ってもらい、おすまし顔でひらひらとちようちよのように出かけていくのをうらやましく見ていたよっちゃんは、姉と同じヨウチエンに行くことを楽しみし

ていた。ところが、妹が生まれ、母も内職をするようになり、よっちゃんは憧れのヨウチエンではなく、ホイクエンと呼ばれる場所に通うことになったのだ。

中間子というのは、親が手をかけられないのが常らしい。幼児期のよっちゃんは、三つ編みどころか、髪を長く伸ばしたこともなく、いつも男の子みたいなザンギリショートカット（しかも色黒）だった。

保育園の運動会の最後の場面。がんばったごほうびとして男の子にはさるのメダル、女の子にはうさぎのメダルが園長先生から一人ひとりに授与された。園長先生が私の首にためらうことなくかけてくださったのはさるメダルだった。もちろん、あとからうさぎメダルに替えてもらったが、幼心にかなりシヨックだった。そのくらい男の子みたいだったのだ。

登園はだいたい父親と一緒にだった。妹に母親を占領されていたためだろう。私は完全に父親っ子であった。父親の膝はいつもよっちゃんの居場所だった。父親にとっても男の子（の代わり）だったのだろう。父の休日に府中競馬場に行したこともあったし、小金井公園で一緒に凧揚げに興じたこともあった。父の大きな手にひかれて保育園まで歩く朝の風景をぼんやりと憶えている。そこではどんな会話が交わされていたのだろうか。父親による保育園送迎の姿は、当時はまだめずらしかったのだろうか。父の生前に当時の話をもっと聞いておくべきだったと悔やまれる。

もう一つ、親子遠足の思い出。その日の朝、同行できない母が他児の母親に「よろしくお願いします」と頼んでいるのをやや不安な気持ちで見上げていた記憶がある。広くて浅いひんやりと気持ちの良い小川で遊んだ。と、私の足先に何かギザ

ギザしたものがはさまった。私はとっさに「カニだ！ カニにはさまれた！」と思い大泣きした。すると、誰かのお母さんがすぐに駆けつけて「カニ〜〜！」と泣き叫ぶ私を抱き上げてくれた。足にはさまっていたのは錆びた空き缶だった。

よっちゃんはちよつと恥ずかしかった。でも、誰かのお母さんに抱っこされてなぐさめられて半べそかきながらもほんわりと嬉しかったのだ。

姉は幼稚園で私は保育園。女の子らしい女の子ではなく男の子に間違われるような女の子だったこと。母親よりも父親との関係が濃かったこと。

自分の親以外の大人にも救われたこと。これらはその後の私の生き方や個性に何らかの影響を及ぼしているだろうし、現在の私が、マルティプル・ペアレンティング（子育てにいろいろな人がかわる）やジェンダーなど保育に関連した諸問題を考えるときの原体験になっている。

よっちゃんとタカダ先生

家庭を離れての初めての園生活。園庭の様子や日々の保育の様子などはほとんど憶えていない。今でも思い出せるのは、いくつかの印象的な場面と、よっちゃんの周りにいた先生とおともだちのことである。

二年間担任だったタカダ先生は「笑顔」と「動き」が印象的な先生である。夏、水着ではなくパンツいっちょになって水遊びをした。小さな小さなプール（プールと呼べるようなものではなかったかもしれない）の外から、笑顔いっばいのタカダ先生がホースで水をかけてくれた。気持ちよくて楽しかった。



冬はお弁当箱をストーブの周りに並べ、温めてから食べたものだ。ある日よっちゃんは、温められた赤いバラの絵柄のアルミ製お弁当箱を誤って床に落としてしまった。大ショック。タカダ先生はカラになってしまったよっちゃんのお弁当箱に、自分のお弁当の中身をていねいに半分に分けて入れてくれた。その時も笑顔だった。

よっちゃんはお昼寝がきらいだった。隣で寝ているおともだちにちよっかいを出してペランダに出されたことがある。ペランダで自分の裸足の足元ばかり見つめながら情けない気持ちで立っていたことを憶えている。が、タカダ先生の叱った言葉も怒った顔も全く思い出せない。私の記憶の中のタカダ先生はいつも笑顔なのだ。

タカダ先生は、リトミックを導入し実践された人物だったらしい。当時の保育園では先駆的な試みであったと思われる。「リトミック」というカ

タカナ言葉は卒園後も母親から何度も聞かされたのでよく憶えている。「おゆうぎ」ではなく「リトミック」。口数の多い方ではなかったよっちゃんもリトミックで身体を動かすのが大好きだった。タカダ先生に「よっちゃんじょうずだね」とみんなの前で褒められた記憶もある。言葉に身体をのせて動く楽しさ。二十代の私がプロダンサーを目指すこととなった原点かもしれない。

現在保育者養成校に勤務しているが、実習巡回で保育現場を訪れるときに、学生が「笑顔」で子どもとかかわっている姿を見るとそれだけでほっとする。よくやっていると嬉しくなる。理屈抜きで保育者の「笑顔」は大事だと思ってしまうのもタカダ先生の影響かもしれない。

よっちゃんとおともだち

保育園という原風景には、先生だけでなく何人

かのおともだちが住んでいる。なかよしのユカリちゃん、おっとりしたマコちゃん、ピアノが上手なツドイちゃん、おふざけ得意なマサアキくん。タカダ先生が名づけたのだろうか。子どもたちが自然にそう呼ぶようになったのだろうか。「おせっかいクミちゃん」「おしゃべりジュンくん」「うそつきマキちゃん」というネーミングで記憶の中に住み続けているおともだちもいる。

「うそつきマキちゃん」は、顔はまったく思い出せないが会話場面が印象的なおともだちである。夕方お迎えを待つ時間帯になると「パパはね。アメリカに行つててね。私も昨日飛行機に乗つてアメリカに行つたの。パパはすごい。宇宙にも行つたのよ」というような、どこまで本当かウソかわからないような話をしてくれるおともだちだった。だからみんなから「うそつき」と呼ばれていたのだが、よっちゃんはマキちゃんの話を知

くのが好きだった。マキちゃんのウソにはわくわくした。子どもはいつ頃からウソをつくのか。人を騙して陥れるウソではなく、人を楽しませるような創造的なウソの効用。マキちゃんは、大学生になったよっちゃんに「フィクション考〜日常から劇的宇宙へ〜」という卒論テーマを与えてくれたおともだちである。

「おしゃべりジュンくん」とは、実は昨秋、何と約四十年ぶりに偶然ネット上で再会した。親が転勤族だったため、小学二年で小金井市を離れたおとも転校を重ね「幼なじみ」とは無縁であつた私にとつて、ジュンくんとの再会は本当に感動的で嬉しい事件だった。ジュンくんはひらがなの「さめじまよしみ」という私の旧姓を憶えていてくれた。私もひらがなのジュンくんのフルネームを憶えていた。保育園時代と転校するまでの学童保育時代、たった数年間とはいえ、日々の「生活」と

「遊び」の濃密な時間を共有したからこそだと思う。再会した私たちはしばし思い出話に花を咲かせた。ジュンくんの原風景にも共通のおともだちが住んでいた。

「おしゃべりジュンくん」は現在俳優さんである。ジュンくんは、そのルーツが保育園時代に「みにくいアヒルの子」のナーレーター役、「ブレーメンの音楽隊」で盗賊の親分役をやったことにあるのではないか、とふりかえって語ってくれた。よっちゃんも劇が好きだった。魔法使い役が決まったとき、父親が雨傘の持ち手部分をノコギリで切り取り、その先に新聞紙を筒状につけ、それこそ魔法のような手さばきで「魔法の杖」をこしらえてくれた。それを持って大得意で魔法使い役を演じたことを憶えている。

さらにジュンくん情報によれば、当時保育園児にして天才ピアニスト！と親たちに絶賛され注

目的であった（おぼっちゃま風だと記憶している）「ツドイちゃん」は、現在ロックバンドのキーボード奏者として活動しているらしい。

ああ、おもしろい。過去と現在はちゃんとながっているのだ。それぞれの個性が少しずつカタチを変えながらもちゃんと生き続けている。

実は「よくばりよっちゃん」と語呂よく呼ばれていたような気がする私。ダンスも好き、音楽も好き、心理劇も好き、家族も好き、友達と遊ぶのも大好き。そして、子どもや保育にかかわる仕事もさせていただいている贅沢者。なのに、まだまだあれもしたい。これもしたい。やっばりよっばりなままだ。

保育園という原風景にいるよっちゃんと、時には対話しながら、これからもよくばりな人生を楽しく歩んでいけたら幸せだな、と思う。

（東京家政学院大学）